

2018年メキシコ大統領選挙と ロペス・オブラドール次期政権

大沼 寛

はじめに

2018年7月1日はメキシコの歴史に記録される日になるのではなかろうか。同日、メキシコにおいて行われた大統領選挙においては、18時に投票が締切られ、報道機関等による最初の出口調査の結果が発表された後、与党制度的革命党（PRI）推薦のミード「全てはメキシコのために（Todos por México）」候補を皮切りに、ロドリゲス独立系候補、最大野党である国民行動党（PAN）推薦のアナヤ「メキシコのための前進（Por México al Frente）」候補が次々に敗北宣言を行ったため、同日23時の国家選挙機関（INE）による公式暫定結果速報の発表を待たずして、メキシコに「ロペス・オブラドール次期大統領」が誕生した。またこのような中、トランプ米国大統領が自身のツイッターを通じてロペス・オブラドール候補の勝利に祝意を表したほか、サントス・コロンビア大統領（当時）、モラレス・ボリビア大統領等各国国家元首からの祝意が続き、ロペス・オブラドール

ル候補の勝利は国際社会に認知された。選挙直前の各種世論調査の結果は、ロペス・オブラドール候補の圧勝を予感させるものではあったが、その勝利はあまりにもあっけないものであった。

ロペス・オブラドール候補は、その選挙事務所が置かれていたメキシコ市中心部のヒルトンホテル前そしてソカロ広場において、多くの支持者の歓声の前でその勝利を高々と宣言し、自身の政権への移行チームを発表した。メキシコ市の大通りには車のクラクションが鳴り響いたものの、歴史的な夜は大きな混乱もなく、驚くほど穏やかに更けていった。現地時間の翌7月2日午前に予定された2018年ワールドカップ・ロシア大会決勝トーナメントのメキシコ・ブラジル戦にメキシコ国民の熱気と関心が移っているようにも感じた。

一夜にして塗り変わった政治勢力地図と権力の集中

7月1日の夜が「歴史的」と述べた理由は、第一

2018年メキシコ大統領選挙の結果



ロペス・オブラドール候補
「共に歴史を作ろう
(Juntos Haremos
Historia:JHH)」



当選

得票率：53.19%

投票総数：30,113,483

●選挙実施日：2018年7月1日

●投票総数：56,611,027 票

●投票率：63.42%



アナヤ候補
「メキシコのための前進
(Por México al Frente:PMF)」



第2位

得票率：22.27%
投票総数：12,610,120



ミード候補
「全てはメキシコのために
(Todos por México:TM)」



第3位

得票率：16.40%
投票総数：9,289,853



ロドリゲス候補
(独立系候補)

第4位

得票率：5.23%
投票総数：2,961,732

出所：国家選挙機関（INE）が公表した最終集計結果（2018年7月8日）



ロペス・オブラドール候補の勝利演説（7月1日夜）

にロペス・オブラドール候補が53.19%という高い得票率を得たこと、第二に同時に行われた連邦上下両院議会議員選挙において、ロペス・オブラドール候補（国家再生運動（MORENA））の選挙同盟である「共に歴史を作ろう（Juntos Haremos Historia）」が両院において過半数（上院：全議席の54%（69/128議席）、下院：全議席の62%（308/500議席）。いずれも8月23日時点）を獲得し、予算、法律、条約の承認等すべての重要事項においてロペス・オブラドール大統領が議会への影響力を確保することになること、第三に同時に行われた地方選挙（メキシコ市長選挙及び8州の州知事選挙）において、「共に歴史を作ろう」がメキシコ市及び4州において勝利を取めた他、全国21州の州議会で第1党となり、少なくとも15州の州議会において過半数の議席を獲得する等、大統領選挙を始めすべての選挙でロペス・オブラドール候補及びその勢力が圧勝したことによるものである。

第一点に関し、大統領候補が50%以上の得票率を得て勝利したのは、1988年大統領選挙において当選したサリーナス候補（PRI）以来であり、また、ロペス・オブラドール候補はグアナファト州を除くすべての州において勝利を取め、次期大統領としての強い正統性を得たと言える。

第二点及び第三点に関し、憲法改正については、メキシコ合衆国憲法第135条は「憲法改正には上下両院の3分の2以上の賛成を得た後、全国31州及びメキシコ市の地方議会の半数以上（17議会以上）による承認（過半数）が必要である」旨定めているが、ロペス・オブラドール次期大統領は、上下両院及び地方議会において現時点では憲法改正に必要な要件は満たしていないものの、今次選挙によって得た絶対的な権力の下、今後他政党の議員を取り込むことにより、憲法改正の要件をクリアする見通しが開けたことが指摘できる。ペニャ・ニエト政権は、

政権発足直後の2012年12月にPRI、PAN、民主革命党（PRD）との間で「メキシコのための協約（Pacto por México）」を成立させ、構造改革路線を推進し、そのために2013年及び14年に憲法改正を行っているが、ロペス・オブラドール次期大統領は、かかる構造改革路線を合法的に修正又は廃止する権力に加え、現在憲法に定められている大統領の再選禁止規定についても修正することができる権力が視界に入ってきたと言える。また上下両院及び地方議会においては、今次選挙に当選した候補者から最大12年間（上院は連続2期、下院及び地方議会は連続4期まで）再選が可能となるため、次回選挙において現職の強みを活かすことが可能になることも見逃すことができない。



7月1日午前のメキシコ州における投票風景（執筆者撮影）

政権移行に向けた迅速な動き

選挙後の「ロペス・オブラドール次期大統領」の動きは素早かった。7月3日には国立宮殿において、ペニャ・ニエト大統領と第1回目の会談を行い、政権移行プロセスについての同大統領の協力を取り付け、次期大統領としての存在を内外に示した。また選挙前に対立した国内の企業家グループと和解し、（PRI、PAN関係者が多数を占める）全国州知事会議にも出席して協力を求めた。

外交面においても、ロペス・オブラドール次期大統領は、7月2日にトランプ米国大統領と電話会談を行い、同13日にはポンペオ同国務長官一行を自身の事務所（政権移行事務所）に招き、友好的な雰囲気の中で会談を行ったほか、同25日にはフリーランドカナダ外相を政権移行事務所に招き、NAFTA再交渉について意見交換を行った。NAFTA再交渉

に関しロペス・オブラドール次期大統領は、次期政権発足前の交渉の妥結を容認しており、セアデ次期NAFTA 首席交渉官を派遣してグアハルド経済相、ビデガラ外相とともに交渉にあたらせる等、現実的且つ柔軟な対応を見せている。

また、ロペス・オブラドール次期大統領は、8月2日にメキシコに駐在する各国大使との初めての会談となる邱駐メキシコ中国大使との会談を行った他、同17日にはメキシコを訪問した河野外務大臣と会談する等、自身が唱えたアジアとの関係強化についても実践している。

ロペス・オブラドール次期政権の不安要因

メキシコのメディアは終日、政権移行事務所前に張り込み、出入りする人物を追いかけている。7月2日以降、メキシコの権力の中樞がロス・ピノス（大統領官邸）から市内ローマ地区にある一事務所（政権移行事務所）に移ったことは誰の目にも明らかであり、先述のとおり、政権移行プロセスは順調に進んでいるように見えるが、ロペス・オブラドール次期大統領から発表される人事や政策から、次期政権に対していくつかの不安を感じざるを得ない。

第一の不安要因は、ロペス・オブラドール次期大統領が発表した次期閣僚である。次期閣僚の中に国政の要職を務めた経験を有する者がほとんどおらず（モクテスマ次期教育相が1998～99年に社会開発相を務めた程度であり、最近閣僚や次官を務めた経験を有する者は皆無）、多くはロペス・オブラドール次期大統領がメキシコ市長時代（2000～05年）の市の幹部、大学教授、企業家、左派の活動家等によって占められており、国政の運営能力が未知数と言える。またペニャ・ニエト政権を含むこれまでの3政権発足時の閣僚の平均年齢は51～52歳であったの

に対し、ロペス・オブラドール次期大統領の閣僚の平均年齢は57.9歳と高くなっていることも特徴的である。

第二の不安要因は、ロペス・オブラドール次期大統領の手法である。8月17日に同次期大統領はメキシコ市新空港建設計画に対する自身の方針を明らかにし、10月28日に当該新空港建設の是非を問う「国民への相談（consultas populares）」を実施すると発表した。この「国民への相談」がどのような形で行われるか明確にしていない。「国民への相談」が国民投票を念頭に置いているものであるとすれば、10月28日の時点で公職に就いていないロペス・オブラドール次期大統領が国民投票を実施する権能を有していないことは言うまでもなく、またメキシコ合衆国憲法第35条は「国民投票は国政選挙と同じ日に実施される」と定めており、かかる条項が改正されない限り、最も近い国民投票は2021年の下院議会議員選挙の機会となる筈である。他方で、「国民への相談」が、ロペス・オブラドール次期大統領が独自に行う何らかの調査を意味するものであるとすれば、当該調査の手続と結果の中に、如何にして客観性、透明性及び正統性を確保するのであろうか。このようなロペス・オブラドール次期大統領の手法の中に、「（既存の法令如何に拘わらず）自分が行うことは常に正義である」との姿勢が垣間見られ、不安を感じざるを得ない。

第三の不安要因は、ロペス・オブラドール次期大統領が発表する政策の中に、副作用を生じさせかねないものや相互に矛盾をはらんだものが多く含まれることである。例えば、各省次官ポストの削減、高級官僚の給料引き下げは各省庁の能力と効率性の著しい低下を招く可能性がある。最低賃金の引き上げはメキシコの製造業の競争力の低下を招き、外国からの投資の減少を招く可能性がある。高齢者や若者への財政的な支援の拡大が財政を圧迫するのは必至である一方で、財政規律の重視が謳われており、財政的な支援拡大の財源については「汚職を撲滅すれば確保できる」という抽象的な考えしか示していない。治安問題に関し、治安問題の根本的な原因は貧困にあるとして、貧困対策を訴えるが、短期的に治安を回復させる有効な手段とはなり得ない。

第四の不安要因は、各国にメキシコ南部の開発やインフラプロジェクトへの参加を求める等、外交を国内問題の延長と捉え、また、自国の開発と繋げる



ロペス・オブラドール次期大統領の政権移行事務所
撮影：レヘネラシオン紙（国家再生運動（MORENA）の党機関誌）

傾向が見られるが、かかる計画を政治的に主導してその参加を「皮算用」したとしても、各国の民間セクターがどれだけ本気で関心を示すかは未知数である点である。メキシコは、世界第11位の経済大国であり、OECDやG20のメンバーとなっている。また、軍縮・不拡散、気候変動等の分野でも存在感を示しているが、ロペス・オブラドール次期大統領の発言から窺えるメキシコ像は、国際社会において応分の責任を積極的に果たそうとするメキシコではなく、伝統的な「不介入主義」に引き籠もった過去のメキシコであるような印象を受ける。

まとめ

ロペス・オブラドール次期大統領及びその勢力は、今次選挙に圧勝した結果、メキシコの変革を大胆に進めていく権力を獲得した。その結果、汚職、治安、貧困・格差というメキシコの課題に積極的に取り組むとともに、引き続き自由貿易を促進し、我が国をはじめとするメキシコ進出の外国企業と良好な協力関係を維持・発展させていくことが期待されており、この点において、我が国としても次期政権を大いに応援していくべきと考える。

他方で、今次選挙の圧勝は、汚職、治安、貧困・格差という問題に対して歴代のPRI及びPAN政権が有効な対応をとることができなかったことに対する国民の失望と怒りそして変革を求める強いエネルギーを、ロペス・オブラドール候補以外に受け止めることができる候補がいなかったことが最大の要因

とも考えられ、メキシコ国民が同候補の政策の1つ1つを支持した結果では必ずしもないという点に注意を要する。

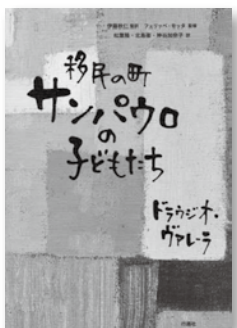
ロペス・オブラドール次期大統領が今次選挙の圧勝をどのように評価しているのか大変興味深い。もし圧勝の要因は全て、国民のロペス・オブラドール候補への信頼と支持にあると認識し、先述した不安要因に対し冷静且つ現実的な対応を行っていかねば、次期政権と国民との距離は次第に開いていくことになるのではなかろうか。この点において、10月28日に行うと発表されたメキシコ市新空港建設の是非を問う「国民への相談」は、次期政権の今後を占う上で、重要な機会となるであろう。

「戦いは五分の勝ちをもって上となし、七分を中とし、十を下とす」との格言があるが、「十を下」とするのは勝ち過ぎると驕りを生じその次は必敗するからと言われている。今次選挙において、ロペス・オブラドール候補は「九」の勝利を取め、今後の他政党の議員の取り込みによって憲法改正の要件を満たせば、「十」の勝利を取めることになる。「勝って兜の緒を締める」冷静さと慎重さが求められている。

(本稿の内容は執筆者個人の見解を表したものであり、外務省及び在メキシコ日本国大使館の見解を反映または代表するものではない。)

(おおぬま ひろし 在メキシコ日本国大使館
一等書記官(政務班長))

ラテンアメリカ参考図書案内



『移民の町 サンパウロの子供たち』

ドラウジオ・ヴァレーラ 伊藤秋仁監訳、
フェリッペ・モッタ監修、松葉隆・北島衛・神谷加奈子訳 行路社
2018年3月 195頁 2,000円+税 ISBN978-4-87534-392-9

1943年生まれでブラジルのHIV、カポジ肉腫の研究者としても著名な医師で作家でもあり、カランジル(サンパウロ刑務所)の矯正医を務めた著者が、1940～50年代に少年時代を過ごした同市の移民の町ブラスでの、子どもや大人たちの活気あふれる生活と郊外の農場での休暇の様子を描いた「ブラスの町で」と「両手を上げて」の32編の思い出とエピソードを綴り、訳語解説を付した第1部と、「ブラジルをよりよく知るための12章」という監訳・監修者によるブラジル事情解説コラムの第2部から構成されている。

ブラジルには様々な出自の移民やかつての奴隷の末裔が居て、それらへも大きな可能性を与えてくれたおおらかな古き良きブラジルを、温かく優しく、懐かしく思い起こさせてくれる。

(桜井 敏浩)